第1章 遺跡の概況と発掘調査の経緯

第1節 遺跡の地理的・歴史的環境

四国の東半部を紀伊水道に向けて東流する吉野川河口付近のデルタ地帯に位置し、右岸一帯に広がる 中洲の一部を埋め立て、近世阿波徳島藩の武家屋敷として営まれたのが徳島市常三島遺跡である(第1 図)。徳島大学常三島キャンパス(総合科学部・工学部・附属図書館等)はこの遺跡の中心部分に位置す る。この地が近世以前にいかなる利用状況であったのかについては、明確なことがわからない。

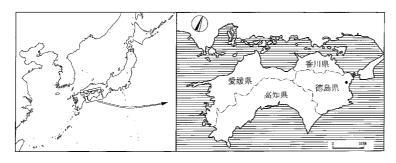
徳島藩は「渭の津」と呼ばれた城山を城構えの中核として城下町を築き、城山を取り囲む形で武家屋敷 「侍屋敷・侍町」や町家「市中」を配置した。その際に、城山の北東側一帯に広がる吉野川の中洲につい ては、そこを新たに埋め立てて家臣団の居住地にあてがったほか、藩の公共的施設のいくつかが配置され た。常三島遺跡は、そのような埋め立て事業によって出現した武家屋敷地区のひとつである(第2図)。

絵図面を参照すると、常三島地区に配置された武家屋敷は主に中・下級武家層に割り振られたことが わかる。ただし城山に面した助任川沿いの南側には上級武家層の屋敷や、初期には次に述べる「安宅」 が割り振られたようであり、中・下級武士の屋敷は北側一帯に割り振られた。

当初、助任川に面する場所には阿波水軍の船置き所「安宅」が置かれたが、17世紀後半には現在の安 宅地区に移設され、跡地は再度埋め立てられて武家屋敷となる。なお「安宅」にかんする具体的様相は、 工学部電気電子棟地点の発掘調査(定森編2005)において判明しつつあるので参照されたい。

中洲を埋め立てて利用されることになった武家屋敷の居住環境は、当然のことながら地下水位が高く、 吉野川や助任川など近隣河川の増水の影響を直接受けるので、城下一帯のなかでも劣悪な部類に属する ものであったと推定される。つまり常三島地区は、このような劣悪な居住環境のもとで約270年間、主 に中・下級武家屋敷として利用された遺跡だということができる。

上記のような居住環境の劣悪さによるところが大きいのであろう、明治維新後も継続して宅地が営ま れるという状況ではなかったようであり、江戸時代の街路区画は残るものの、一帯は急速に水田化する。 明治期の地図をみると、水田域の数箇所にため池が散在する状況であったことがわかる。そしてこうし

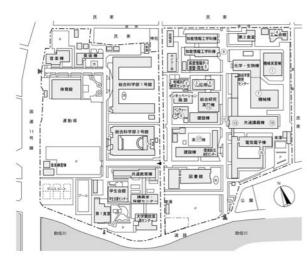


第1図 常三島遺跡位置図 ●が常三島遺跡



第2図 調査地位置図(縮尺:約1/55,000) 1. 常三島遺跡(常三島キャンパス) 2. 新蔵遺跡(大学事務局)

は工学部実習棟試掘(第1次調査)地点 ▲は地域共同研究センター棟(第2次調査)地点 ⑭は第14次調査地点



第3図 常三島遺跡発掘調査地点図 囲み数字は第1表の次数に一致 (第14次調査地点の位置は第2図の④)

第1表 常三島遺跡(徳島大学構内)発掘調査一覧表

	調査名	調査実施年 (年度)	調査地点	調査面積 (m)	調査期間	調査主体	担当者
	第1次調查	1992年 (平成4年度)	工学部実習棟	180	9月10日~9月20日 (11日間)	徳島大学	東 潮 〇北條芳隆
	第2次調查	1993年 (平成5年度)	地域共同研究セン ター棟	576	10月1日~10月30日 (1ヶ月)	徳島大学	東 潮 〇北條芳隆
	第3次調査	1995年 (平成7年度)	光応用工学科	783	8月22日~3月25日 (7ヶ月)	徳島大学	東 潮 〇橋本達也
	第4次調查	1995年 (平成7年度)	工業会館	400	12月1日~1月31日 (2ヶ月)	徳島市教委	勝浦康守
	第5次調查	1996年 (平成7年度)	光応用工学科-追加	165	4月17日~5月30日 (1ヶ月半)	徳島大学	東 潮 〇橋本達也
	第6次調查	1996年 (平成7年度)	サテライト・ベンチャー・ ビジネス・ラボラトリー	619	6月6日~8月10日 (2ヶ月)	徳島大学	東 潮 〇橋本達也
	第7次調查	1997年 (平成8年度)	機械工学科	1,800	7月24日~11月8日 (3ヶ月半)	徳島大学	北條芳隆 〇橋本達也 中村 豊
	第8次調查	1997年 (平成9年度)	総合情報処理セン ター	687	3月28日~6月10日 (2ヶ月半)	徳島大学	北條芳隆
	第9次調查	1998年 (平成9年度)	共同溝	178	7月22日~9月4日 (1ヶ月半)	徳島大学	北條芳隆 〇中村 豊
	第10次調查	1999年 (平成 10 年度)	共通講義棟I	900	5月10日~6月7日 (1ヶ月)	徳島大学	北條芳隆 〇中村 豊
	第11次調查	1999年 (平成 10 年度)	共同溝 II - 4	200	6月28日~8月11日 (1ヶ月半)	徳島大学	〇北條芳隆 橋本達也
			共同溝Ⅱ-1 共同溝Ⅱ-2	171 300	7月15日~5月26日 (10ヶ月)	徳島大学	北條芳隆 〇橋本達也
	第12次調査	2000年 (平成 11 年度)	総合研究実験棟	1,000	7月24日~11月27日 (4ヶ月)	徳島大学	北條芳隆
	第13次調查	2001年 (平成 12年度)	総合教育研究棟 (共通講義棟 II 期)	1,110.6	3月15日~6月8日 (3ヶ月)	徳島大学	北條芳隆 〇中村 豊
	第14次調查	2002年 (平成13年度)	総合グランド管理舎 器具庫の配水管	100	2月21日~3月1日 (2週間)	徳島大学	北條芳隆
	第15次調查	2002年 (平成14年度)	工学部電気電子棟	253	5月20日~8月5日 (2ヶ月半)	徳島大学	〇定森秀夫 中村 豊
	第16次調查	2002年 (平成 14 年度)	総合科学部3号館	532	7月29日~10月31日 (3ヶ月)	徳島大学	〇定森秀夫 中村 豊
	第17次調查	2003年 (平成15年度)	工学部建設(総合研究) 棟	381	4月28日~7月17日 (2ヶ月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊

た明治期以降の水田化が、この地に徳島県尋常師範学校附属小学校や徳島大学工学部の前身である徳島 高等工業学校が誘致される遠因でもあった。

徳島県尋常師範学校附属小学校は1898年に誘致され、徳島高等工業学校は1922年に設置される。また相前後して再度宅地化が生じ、徳島市域の一角を形成することになったが、太平洋戦争の空襲によって徳島市域一帯は灰燼に帰し、常三島遺跡一帯にも多量の焼夷弾が投下された。この空襲によって江戸時代以来引き継がれてきた地域文化の多くが焼失する。そして太平洋戦争敗戦後の復興は、地域文化や歴史の忘却とともにはじまったのであるが、この断絶と忘却を埋め合わせる遺産の宝庫として、常三島遺跡は現在に引き継がれている。

なお第3図と第1表に示したように、2006(平成18)年3月現在、常三島遺跡での発掘調査実績は第17次までを数える。今回報告を行うのは、このうち第1次調査と第2次調査分である 11 。

第2節 調査に至る経緯と調査経過

1. 工学部実習棟地点

1)調査に至る経緯

工学部実習棟建設工事に先だって1992(平成4)年9月9日に開かれた徳島大学埋蔵文化財調査委員会では、建設予定地に徳島藩の武家屋敷跡が遺存している可能性のあることが室長の東潮によって指摘され、発掘調査の必要性が提起された。この時点においては、徳島県教育委員会でも徳島市教育委員会においても城下町遺跡に対する埋蔵文化財包蔵地としての網掛けを行っていなかったこともあって、前例のない案件であった。ただし埋蔵文化財調査室を設置した初年度でもあり、徳島大学として校内の埋蔵文化財に対する基本姿勢を確固たるものとして位置づけるべき時期にあるとの判断が下されることとなり、審議の結果、工事日程を一部変更し応急的な試掘調査を実施することが決定された。

調査の目的は当該地区における江戸時代およびそれ以前の時代に属する遺跡の保存状態を確認し、今

後の対応を検討するうえでの基礎資料を得ることであった。調査は平成4年9月10日に開始すること となった。

2)調査経過

実習棟建設予定地内において、南北・東西両方向に直交する発掘区(トレンチ)を設け調査を実施した。 発掘区は南北33m・東西28m、幅は共に3mとした。調査面積は180㎡である。調査の方法は、工学 部敷地全体に堆積する造成土を重機で除去することから始め、それ以下は人力掘削で行うこととした。

9月10日、東立会いのもと発掘区を設定し南北トレンチから重機掘削を開始。現地表下80cmまでは 粗砂の純粋な堆積であったが、この粗砂を剥ぎ取った直下で灰色シルト層を検出し、この層から江戸時 代後期の陶磁器類が出土した。そのため、この層位以下が江戸時代の遺物包含層であると推定した。な お重機掘削はシルト層の直上までとし、以下は人力掘削により遺構・遺物の検出作業を実施することと なった。翌11日には東西トレンチの重機掘削に入り、掘削を終えた部分から順次遺構検出作業を開始 した。南北トレンチ南端部では浅い溝に礫が散漫と敷かれた状態の遺構(溝3)を検出したほか、東西 トレンチからは杭と板材を用いた溝(溝1)の上面が検出された。12日には上記の2遺構のほか数箇所 で確認された遺構の精査を実施。遺物は陶磁器類・瓦片が主体で発掘区の各所から出土した。13日には 南北トレンチ北半部の重機掘削を開始。14日には発掘区全体から地下水の湧水が激しくなったため、応 急処置として排水用の側溝を掘削したが、効果はなかった。

15日には南北トレンチの重機掘削を終了。遺構検出作業の結果、南北トレンチでも幅の広い溝(溝4・ 溝5)の上面を検出したため、直ちに精査を開始。16・17日は上記各遺構の綿密な検討作業を継続した。 これら各遺構は出土した陶磁器類から判断して、いずれも17世紀中頃から19世紀中頃にかけてのもの であることが確定的となった。18日には上記各遺構の掘り下げ作業・写真撮影と並行して発掘区全体の 平板測量を実施。19日には午後7時まで作業を延長し、各遺構の平面図・土層断面図の作成作業を行っ た。翌20日には各遺構の掘り下げ作業・写真撮影・測量作業を終了した後、埋め戻しを行って調査を 終了した。





第4図 工学部実習棟地点の調査風景

2. 地域共同研究センター棟地点

1)調査に至る経緯

実習棟新営地において1992(平成4)年に実施した埋蔵文化財試掘調査の結果、本キャンパス一帯は江戸時代の徳島城下の一角にあたり、かつ武家屋敷跡が良好な保存状態で地下に埋没していることが明らかとなった。徳島における城下町研究は、これまで絵図や古文書類の史料をもとに進められてきたが、城郭部分と町屋部分の研究に重点が置かれてきたこともあり、武家屋敷の実体については不明な点が多かった。試掘調査の成果は、まさにこの未解明の部分にかんする実証的な調査研究が可能であることを示すものでもあり、貴重な新知見をもたらした。

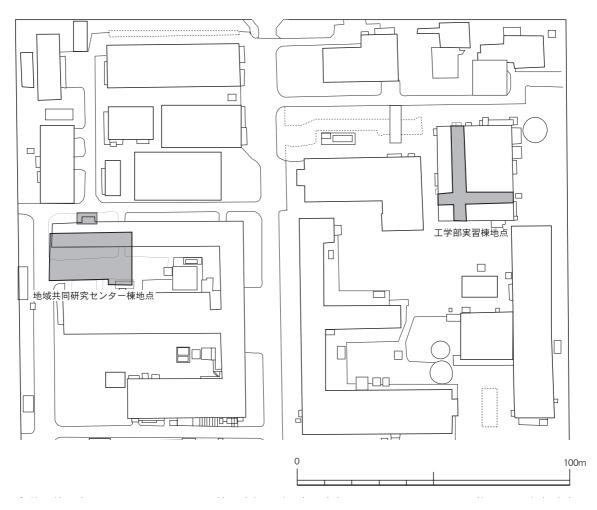
こうした試掘調査の結果を踏まえ、徳島大学埋蔵文化財調査委員会は、徳島県教育委員会など関係諸機関との協議を経て、1993(平成5)年度以降、常三島キャンパス地区を埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこと、および当該地区の発掘調査については埋蔵文化財調査室が担当することを決定し、当該年度には地域共同研究センター棟の新設工事に先だって事前の発掘調査を実施することになった。調査は10月1日に開始した。

2)調査の目的と方法

1992(平成4)年の試掘調査の結果、調査地周辺は地表下80 cmまでは造成土が堆積し、遺物包含層はそれより下方に存在することが判明した。そのため、調査は地表下80 cmまでを重機掘削とし、それ以下を人力掘削とした。なお地下水位の関係で、調査地周辺では地表下130 cmまで掘削するのが限度であり、それ以下は湧水が激しく調査不能であることも試掘時の経験から予測された。したがって調査可能な包含層の厚さは約50 cmに限定せざるをえなかった。また調査にあたっては全般的に地下水の影響を強く被り、遺構の掘り下げや写真撮影などに多大な制約を受けることも十分に予測されるところであった。そのため、こうした調査地の条件を考慮しつつ可能な限り綿密に遺構面を追求し、埋蔵文化財の記録保存を実施することにした。

なお調査に先だって、当調査室では今日に残る数枚の絵図と古地図および古文書類を検討し、常三島地区における武家屋敷配置の復元作業を実施した。作業内容は「御山下島分絵図 常三島」(安政年間、個人蔵)を下地として、そこに『阿波藩士屋敷録享保17子年改』(高田豊輝書写、1964年)のデータを重ね合わせ、『徳島藩士譜 上~下巻』(宮本武史編、1972・1973年)によって当該時期の居住者名や禄高を当てはめるという作業であり、作業成果物を現在の工学部建物配置図のうえに縮尺調整してかぶせるというものである²)。こうして完成したのが本章最終頁に掲載する第7図であるが、今回の復元案にもとづけば、調査地は佐野家の屋敷地内にあって、その北半部にあたり、北側に隣接する長谷川家の屋敷地との境界部分が検出される可能性も高いと推定された。そのため調査にあたっては、こうした復元案が妥当であるか否かの検証作業を実施したいと考えた。したがって今回特に重視した課題は、第1に調査地の北端部分に屋敷の境界部の遺構が検出できるかどうかを確認することであり、第2に調査地の住人が佐野家であったことを示す証拠が見つかるかどうかを追求することであった。幸い佐野家は代々医師であったことが古文書から判明している。そのため医療関連器具の出土に期待が集まった。

調査区の配置は第5図に示したとおりで、本棟建設予定地と北側の共同溝設置予定地の2箇所からな



第5図 常三島キャンパスにおける発掘調査地点の位置関係

る。なお本棟部分については旧中庭部分(303㎡)を当初の調査区とし、北側の旧校舎解体部分(203 m) については拡張部として調査を実施した。

3)調査経過

10月1日に本棟建設予定地部分の重機掘削を開始し、2日に終了。4日から人力掘削を開始するとと もに共同溝部分の重機掘削を実施した。6日には調査地全体にグリッドを設定し、共同溝部分をA区、 本棟部分をB区とする。調査はB区から開始した。4日以降、B区からは多量の遺物が出土。7日、B 区において方形の石組みと井戸枠を検出、範囲の確認と全体の掘り下げを急ぐ。11日、調査区全体で湧 水が激しくなり、湧水対策が急務の課題となる。12日にかけての作業は、この湧水対策としての排水溝 の掘り下げが主体となったが、以後雨天のたびに同様の作業を行わざるをえず、湧水対策には最後まで 頭を痛めることとなった。12日には、遺物包含層の上層から大谷焼の埋甕1基を、付近からも数基の土 坑を検出した。15日までに、B区で発見された石組み遺構は、幕末期ないし明治期の方形水溜遺構であ ることが確実視されるに至った。なお遺構面の設定については、江戸時代後期から幕末期にかけてのも のと推定される遺構群を第1遺構面とし、該当する遺構についての写真撮影と実測作業を実施し、18日 までに作業を終えた。なお方形水溜遺構からは薬品調合用とも推定される竹製の匙が出土したことによ





第6図 地域共同研究センター棟地点の調査風景

り、調査地が佐野家跡であるとの確証を得るに 至った³⁾。

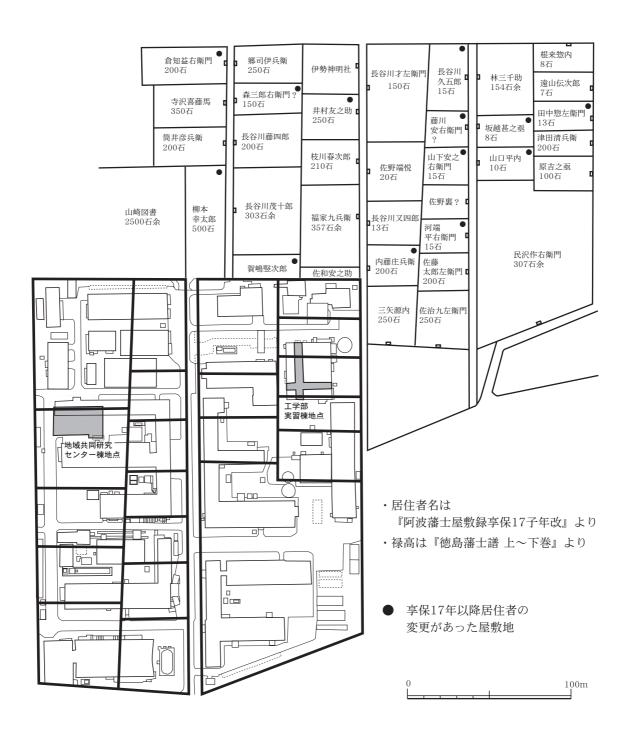
A区の掘り下げ作業は14日から開始。既設の 配水管を切断したために、排水対策に時間を費や したものの16日までに遺構の検出を終え、18日 に写真撮影を実施。下層の掘り下げを行ったが明 確な遺構は検出されず、20日に完掘状況の写真撮 影を実施。またB区では、17世紀後半から18世 紀中頃までの遺構を検出し、これらを第2遺構面 とする。ゴミ穴かと思われる土坑が確認されたが、 地下水の湧水が激しく、検出後半時間を待たずに 水没してしまうため、丁寧な掘り下げ作業を断念 し、検出面での規模・形状・深さ等、最低限のデー タを記録する方針をとることとした。22日に第 2遺構面の検出状況写真撮影を実施、25日まで各 遺構の掘り下げを行う。

絵図との対比から、A区とB区の中間地点に佐 野家屋敷と長谷川家屋敷の境界部分が存在する可 能性が指摘されたので、この点を確認すべく、B

区を北に約5m拡張したい旨を施設部に連絡し了承されたため、25日から拡張部の重機掘削を開始。引 き続き人力掘削を行う。拡張部の北端において多量の瓦片・陶磁器片を埋め込んだ溝を検出し、両屋敷 地の境界部分を確認するに至った。27日には全体の写真撮影を実施。28日から土層断面図、遺構の実 測作業、方形水溜遺構の断ち割り調査に入り、30日午前中までに終了。同日午後記者発表を行い、これ と並行して機材の撤収作業を実施、夕方には調査室への遺物搬入を終え調査を終了した。

第3節 調 査 体 制

工学部実習棟地点と地域共同研究センター棟地点の調査は、平成4年度および平成5年度の徳島大学 埋蔵文化財調査委員会(委員長 武田克之)の統括のもと、埋蔵文化財調査室が実施した。発掘調査は 室長 東 潮(総合科学部助教授)の指導を受けながら調査員 北條芳隆(医学部助手)が担当し、地 域共同研究センター棟地点の発掘調査には、調査補助員として北條ゆうこ(施設部技術補佐員)が加わっ た。なお工学部実習棟地点の調査にあたっては北條ゆうこと徳島大学総合科学部考古学専攻生安山かお りの援助を受け、地域共同研究センター棟地点の調査では徳島大学総合科学部考古学専攻生(大北和美、 木村真紀、尾上博一、光永(旧姓三岡)雅子、中川尚)の援助を受けた。



第7図 常三島遺跡における武家屋敷の配列関係 (1993年段階の復元案)

8 第3節 調査体制

註

- 1) 常三島遺跡の現在までの発掘調査実施状況については2005年度に刊行された『常三島遺跡1』(定森編2005) 第1章において解説されている。
- 2) 今回提示する復元案は当調査室で作成した最初期のものであり、その後の再点検の過程で修正が必要になったところがある。その後の修正・変更案については、第3次調査以降の実地調査成果とのすり合せを行いつつ、 今後の報告書において随時改定していく予定である。
- 3) 2006年3月31日現在、匙の現物は所在不明である。

引用文献

定森秀夫編 2005『常三島遺跡 1 —工学部電気電子棟地点—』(徳島大学埋蔵文化財調査報告書第2巻)国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室